

<学会記録>16. 過去5年間の歯性感染症の臨床統計学的ならびに細菌学的考察(東日本学園大学歯学会第3回学術大会(昭和59年度総会))

著者名(日)	磯貝 治喜, 麻生 智義, 舘山 佳季, 利根川 一郎, 平 博彦, 谷内 政喜, 北村 完二, 村瀬 博文, 堀越 達郎, 額賀 康之, 金澤 正昭
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	4
号	1
ページ	79
発行年	1985-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00007165/

15. ハムスター頬嚢癌における γ -glutamyl transpeptidase (GGT) 組織化学の多彩性

小田島哲世, 舘山美樹, 賀来亨,
奥山富三 (口腔病理)

口腔癌の実験モデルとして, ハムスター頬嚢癌は良く知られている。最近, 我々は γ -glutamyl transpeptidase (GGT) が頬嚢癌形成過程を解析する重要なマーカーとなりうる可能性を報告した。すなわち, 頬嚢粘膜に発癌剤処理後, 数日にして GGT 陽性の細胞が出現し, やがてこれが数個集って GGT 陽性の細胞集団となり, 過形成上皮, 異形性上皮, 乳頭腫, 癌の各期の上皮にもこれら陽性巣が出現する。しかし癌組織においては, GGT 活性の

局在は多彩となり, 癌実質の上皮のみならず, まれには間質の血管壁や炎症細胞にも GGT 活性がみられる。癌実質上皮では, GGT 活性は, 癌細胞の増殖帯である胞巣辺縁部よりはむしろ分化した癌真珠周辺域や単一角化細胞にみられることが多い。

このような癌組織における GGT 活性局在の多彩性の意義について考察を行った。

16. 過去5年間の歯性感染症の臨床統計学的ならびに細菌学的考察

磯貝治喜, 麻生智義, 舘山佳季,
利根川一郎, 平博彦, 谷内政喜,
北村完二, 村瀬博文, 堀越達郎,
額賀康之*, 金澤正昭*
(口腔外科II, *口腔外科I)

今回われわれは, 本学附属病院開設以来5年間, 口腔外科外来を訪れた歯性感染症患者の臨床統計ならびに細菌学的考察を行った。

対象は, 歯性感染性で膿汁等の試験材料が得られ, かつ薬剤感受性試験を実施した男性55例, 女性33例の計88例である。

まず, 年齢分布をみると, 30歳代(19例)40歳代(18例)で全体の42%を占め, 疾患別では歯肉膿瘍22例, 骨膜下膿瘍が21例と両者で全体の約50%を占めた。

一方, 細菌の検出率は男性41例, 女性14例の計55例で62.5%であった。これら検出された細菌をグラム染色性で分類するとG(+)のみの感染症が45例と圧倒的に多かつ

た。

さらに, 検出された細菌に対しペニシリン系をはじめ, セフェム系, テトラサイクリン系, マクロライド系, アミノグリコシッド系薬剤のディスクを用いて感受性試験を行った結果, ペニシリン系およびセフェム系薬剤で比較的高い感受性を示した。

質 問

馬場久衛(口腔細菌)

検出されたG(+)の菌の形態・配列は如何でしょうか。

回 答

磯貝治喜(口腔外科I)

グラム陽性菌の形態に対しては, 桿菌群に比べ, 球菌群の方が多く認められます。文献的にも球菌群が多く認められると報告しております。

17. Anti-Candida substance (ACS) 含有培地を用いた口腔からの *Candida* 属の検出について

鎌田有秀, 秋貞泰輔, 小松 始,
金森啓子, 田中かえで, 野崎善弘
(口腔細菌)

目的: 演者らは *Bacillus natto* が産生する抗 *Candida* 物質 (ACS) が *C. albicans* の同定の補助手段となるこ

とを報告してきた。今回はこのACSを利用して口腔内の *Candida* 種の混合寄生様相について若干の検討を加えた。